

1 学校教育目標

1 自らが課題を認識し、仲間とともに解決に向けて思考・判断し、行動できる「生きる力」を育成する。
2 ビジネス分野における新たな価値の創造に挑む、商業の「スペシャリスト」を養成する。
3 幅広い「教養」と豊かな「人間性」を身につけさせる。

2 目指す姿（学校像・生徒像・教師像）

○ 人と人をつなぎ、多様な力を生み出し、社会に広げる行動的な人材を育成する学校
○ 自らの力を試し、仲間と協働して様々な課題に挑み、その取り組みを振り返りながら自らを高めていく生徒
○ 基本的な生活習慣を身につけ、前向きに取り組む生徒
○ 将来に希望を持ち、望ましい職業観・勤労観を身につけ、進路実現に挑む生徒
○ 生徒に新しいことに挑戦するきっかけを与え、励まし続ける教職員
○ 生徒に深い思考を促し、自ら判断して責任を持って主体的に行動する意欲を高め、持続させる教職員
○ ESDの視点で外部と連携し、生徒に多様な価値観や文化に触れさせ、実践的な学びを創出する教職員

3 現状と課題

○指導と評価の一体化を図り、学習・指導の改善充実や教育環境の充実等による「主体的・対話的で深い学び」の実現に取り組む。
○経済のグローバル化、ICTの進歩、観光立国の流れなどを踏まえ、ビジネスを通して、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人を育成できるように改善・充実を図る。
○本校の教育内容と実施状況、学校を取り巻く状況、中学生のニーズ等の分析を行い、中学生にも魅力ある学校づくりに努める。

4 目標

[中期経営重点目標]
○思考力・判断力・表現力の育成と学びに向かう内発的動機付けの工夫
○道徳教育の充実及び保護者・地域社会との教育ネットワークの充実
○業務の明確化と改善策の検討

「評価結果」の評価基準について
4：目標達成
3：目標を達成していないが、成果が見られる
2：目標を達成しておらず、成果もあまりないため対策の見直しが必要である
1：目標を達成しておらず根本的に見直しが必要である

[評価指標]
○学習評価方法の早期確立と評価の活用による授業改善と学習意欲の向上
○いじめや学級内の問題に対する組織的な対応、HP等で高頻度に学校の魅力を発信
○定時退校日(17:30までに退校)の実施頻度

短期経営重点目標（2年目）	評価指標／評価結果	主な具体的方策	実施状況	分析結果(○は成果、●は課題、◎は改善点)
各教科における「主体的・対話的で深い学び」に繋がる授業展開と新学習指導要領に基づく学習評価の実践的研究により、学習意欲が高まったとする生徒を70%以上にする。	生徒アンケートにより、学習意欲の高まりを客観的に把握する。観点別評価を活用し、学習内容を体系的・系統的に理解しているか、物事に対して主体的かつ協働的に取り組む姿勢を養うことができているかを判断する。 主体的に授業を受けている 63.7% 対話してお互いに理解を深めている 91.8% 協働して取り組んでいる 88.9% 学習意欲が高まった 57.4% 評価 (4段階) 3	○各教科において「主体的な学び」「対話的な学び」の視点を重視した授業実践、研究授業を行いながら、目指す生徒像の共有を図り、生徒に対しても年度初めやテスト返却時にその必要性についてのアナウンスを積極的に行う。 ○各教科でICT等をどのように活用しているか、どのような教材を扱っているかを共有する場を設ける。 ○年間指導計画表に基づき、「探究的な学び」を実践し、地域や産業界と連携を図り、講話等で実体験を聞かせる機会を設ける等より実践的で体験的な学習活動を実践していく。	・全学年の生徒がタブレットを活用し、生徒自身の主体的な学びにつながっている。他の文房具と同様、使用頻度も増し、資料の閲覧や検索、記録に慣れつつある。 ・メタモジは、生徒や教員でも多用され、効率化が図られている。また、授業でも生徒の振り返りに適している。 ・授業観察月間を中心に、先生同士の互見の場として、生徒の様子、授業スタイル、深い学びにつながる発問等、工夫された指導を知る機会となっている。 ・授業において、グループワークや発表を取り入れている展開が多くなってきている。 ・教員用USBにより、採点や授業教材の活用等、スムーズな授業展開が実現できている。 ・学校全体の起業家教育講演会に加え、コース別にも起業に関する招聘授業を行い、生徒だけでなく、先生方にも実話をもとに起業についての意識が高まる機運となった。 ・「広島魅力発見ツアープロジェクト」や「課題研究」において、地域との関わりが深まる展開できている。	○タブレットの活用により、生徒自身だけでなく、教員側も生徒の活動記録をいつでも簡単に評価することができる。 ●振り返りの記録の活用と指導と評価の一体化につながる授業改善について、引き続き、取組を推進する必要がある。 ◎生徒の個別最適な学びを促進するため、次年度は、動画教材や個に応じた学習システムを導入し、 ◎ハイスクールビジョン推進プログラム実施委員会を中心に、生徒実態に即した観点別評価の改変を行った。 ●授業観察月間を柱とし、自然に他の先生の授業を見て回る風土の醸成が必要である。また、観察する視点を示し、より効果的な手立てが必要である。 ○実業家から直接お話を聴くことは、生徒に真剣さを持たせながら、商業教育の意義や面白さ、経営者目線での物事の捉え方を学ばせることにつながっている。 ○学習や実践を通して、何ができるようになったのか、また、生徒自身が学びに対しどのように調整するのかを考えさせる仕組みづくりが必要である。 ●本校生徒の成果や課題を整理し、目指す生徒像、向かうべき方向をグランドデザインで視覚化することが急務である。
地域と連携し、生徒の主体的な活動として、人権意識、公共マナー、交通マナーの向上や奉仕活動などに取り組み、学校内外での行動意識が高まったとする生徒を75%以上にする。	生徒アンケートにより、社会貢献や公共マナー、交通マナーに関する意識を把握する。 挨拶/マナーの習得 80.2% 公共意識の向上 89.3% 評価 (4段階) 4	○学校運営協議会で、地域の方々との関わり方を検討していくとともに、学校集会等で実際に外部の方（広島東警察署など）の講話通じて、普段の公共マナーや交通マナーについて意識するきっかけを作る。 ○どのような地域の奉仕活動ができるか、主体的に考えさせその集計結果を再度生徒に示し、授業に絡めて「主体的に行動することの重要性」についてアナウンスし、地域から支えてもらえる学校になるためには自身に何ができるか考えさせ行動させる。 ○生徒会の各委員会やピースデパート役員会を中心に、全校生徒への呼びかけを行い、人権意識、校則や公共ルール等について考えさせ、主体的に学校生活をより快適なものにするための活動を促す。	・牛田地区の交通マナー指導に教員が参加した。地域の実態を知るとともに、地域の方とのコミュニケーションも図ることができた。 ・牛田地区の保育園の夏祭り運営ボランティアに参加し、地域の方との絆を深めた。 ・牛田中学校地区地域美化活動に、園芸部とサッカー一部が参加し、清掃活動を行った。 ・牛田地区の施設を訪ね、制服の余り布を使った巾着袋を手作りし、寄付を行った。 ・取組が認められ、広島グッドチャレンジ賞を受賞した。	○地域の方への感謝の気持ちが強くなるとともに登校時の様子がわかるとともに、地域の方との関係づくりにもつながった。地域の方から学校に対する思いを聴くことができた。 ○生徒自身に地域社会の中の自分という所属意識を持たせることができ、地域に目を向け考えることや郷土愛を育むことにつながった。 ○校内外において、挨拶がよくできているとの評価を伺った。 ●通学時のマナーや自転車事故等を自分事としてとらえ、行動に移せる教育を展開していく。
業務改善を進め、全教職員の年間月平均の勤務時間外の在校時間を45時間以下にする。	毎月の勤務時間外の在校時間を在校時間管理システムにより把握し、在校時間が45時間以下の教員の割合を90%以上にできるよう進める。毎月の勤務時間外の在校時間が45時間以下の教職員の割合： 56.8% 評価 (4段階) 2	○各分掌等で印刷にかかる時間を削減し、資料はタブレットを活用する（職朝伝達等）などして共有を図ることで業務改善を進める。また、ペーパーレス化を促進させ、業務の効率化につなげる。 ○教職員が複数で正確に成績処理が遂行できる時間を計画する。 ○学年・分掌で仕事の振り分けを確実にし、仕事の負担軽減につなげていくとともに、定時退校日を設定し、全体で確認することで、援助希求しやすい職場環境づくりを進める。	・教員の公用USBの管理簿による管理体制を運用し、適正な管理ができている。 ・定時退校日一覧を作成、配付し、他の教員の定時退校日の見える化を進め、声をかけやすい雰囲気づくりをしている。 ・年間3回の成績処理日を設け、正確に確認作業ができる体制を整えて実施できている。 ・部活動は、複数顧問または、部活動指導員で連携し、分担して休むことができる日を創出している。 ・教員のタブレット使用や資料のデータ化により、大幅な効率化が図られるとともに、生徒や先生方のICT活用能力が向上している。	○公用USBやタブレットの活用により、業務の円滑化が図られている。 ●授業において、タブレット等、ICTを活用した効果的な授業の研究や導入をさらに広めていかなければならない。 ○新たな観点別評価が適用され2年がたち、指導と評価の一体化に向けた評価方法について改良が進みつつある。 ●成績処理について、落ち着いて確認できる環境の整備と慣れや思い込みを左右されないよう、教員側の意識を高め実践していく。 ○校内での自動採点システムの普及、活用を継続していき、多くの先生が使用できるよう、呼びかけていく。

5 学校関係者評価に関する事項（主な意見等）

○生徒の実態や学校の目的を踏まえ、成果や課題を十分整理して行く中で、次年度につなげてほしい。
○「主体的」とは何かについて、引き続き協議を行い、グランドデザインの作成に生かしていくべきである。
○業務改善については、継続的な声掛けに取り組んでいく必要がある。

6 その他の報告事項

○ユネスコスクールのネットワークを活用し、生徒主体の活動を推進した。
○ハイスクールビジョン推進プログラム実施委員会での議論や取り組みが進むよう、仕組みづくりを検討した。